

このことは片隅で起こった出来事ではありません 使徒言行録 26章26節より

中国支部長 四五期

岡山 旭東教会・十文字平和教会 森言一郎

※以下、少しの加筆をホームページ掲載にあたりしています。

気 が付いてみると神学校を卒業してから三十年である。一緒に入学、あるいは卒業した仲間たちも減り始めた。同世代の仲間すら既に二人召されている。みんな色々あった。自ら命を絶った者も、崩れ落ちるようにして消えていった仲間も。私も本当に色々あった。

私 はといえば何度も死んだ。少しも大げさではなく、死んだ。それなのに今がある。神さまの不思議なご配慮、憐れみにより、卒業以来、南に北に、西に東にと転

々とした。引っ越しの見積りのとり方は誰にも負けないほどである。なぜだか、地方一筋三十年である。異動の距離を積算すると、たぶん本当に現役で仕える卒業生では（海外の宣教師や留学は別として）一番ではないだろうか。

ひ と昔、というほどの時の経過があるが、ある年の瀬の月曜日、精神科クリニックで診察を受けた。映画館でおかしくて面白くてという邦画を見ているときに、画面に次々と自死をしていった方々の顔が出て来た。当時の私の体重は60kgそこそこでガリガリだった。数ヶ月前にかかりつけ医から「森さん、いいお医者さんを紹介しますよ」と言われたことがあった。それは精神科医ということだと気付かなかった。今は85kgを超える（控えめ数値）。

冷静な診察をしてくださり、ある意味恩人と

も言えるような存在となったドクターは私の話を聴き終えると、「森さん、そんな所に居続ける必要な少しもありません。人事権を持つ人は？」と言い、転任を勧めた。「離れてください。そうすれば治ります」ということだった。

神 学校に在学当時の日本聖書神学校の校長は就任して間もない小林利夫先生だった。考えてみると、年齢は今の私と同じ位ということも驚きだ。小林先生は幾つかの授業の駒を担当されていたが、「せめて十年は一つの任地で仕えなければねえ」と何度か授業で口にされたと思う。それは本心でそう仰っていることも分かったし、信念だったのだろう。授業の中身はほぼ忘れていたが、この言葉だけは忘れなかった。そして、転任の度にずーっと気になっていた。

つ　こ数年、私は月に一度のペースで
　　使徒言行録の講解説教を続けてきた。創世記・出エジプト記と旧約も読んで来たが、この使徒言行録。終盤になって力を受けたことがある。使徒パウロは町々を転々としながら種を蒔いた人だ。頼もしい助け手も与えられ、教会が立ち上がるのを見守ってきた。と同時に、迫害を受け、並大抵ではない苦勞をし、時にその地から逃げ出し、ある種の烙印を押され続けた。説教は三階から若者が眠りこける内容だったという。だが、今や彼が関わった教会（例えばフィリピ）は石ころが残っているだけの所も多い。旅のパウロ。私には慰めだ。

前任地は最北の町にある稚内教会だった。礼拝出席は十人と少し。苦い思い出も当然あるが、教会の方とも道北地区の人たちとも、短い期間だったけれど交わりは濃かった。家族の健康問題もあり志半ばとい

う中で転任を迎えたが（生きていると、まさに、本当にいろいろ起こる）、この頃、母校の神学校は遥か遠くにあった。

当時楽しみにしていたのは、厳冬の二月の一ヶ月間、旧樺太・サハリンからやって来て、ロシア民謡を歌と踊りで伝えてくれるルースキー・テーレムという音楽舞踏団だった。これは、YouTubeで検索すれば、その映像を観ることが出来るはずだ。空気も感じられるだろう。私にとってロシア人とは彼らのことであり、彼らが大好きだった。声掛けをすることも出来るほどだった。「ハラショー（ロシア語で素晴らしい!）」と数少ない観客の一人として声を出していたものだ。

稚内ではさらに、利尻昆布バザーなるものに取り組んだ。まさか、この私が昆布牧師を自認するようになるとは考えも

しなかった。思いがけず全国の教会に便りを送り、新しい出会いが生まれた。今でも手紙のやり取り、メールのやり取りを続けて居る関東地方在住の骨太信仰のご婦人も居られる。北の端っこの町稚内では、教会の外から声掛けを頂き（市議や元・小学校校長、大学教授、旧国鉄で人員整理されたご家族をもつ方、共産党の方など）、市民有志と共にピースウォーク稚内を立ち上げ、シンポジウムを行い、共に語り合い、共に歩き、共に学んだ。目立たないような名前を使ってある図書館での学習会が恒例だった。飲み会も続いた。稚内では出会う人が変わっていった。

九 年前、五三歳の時に岡山に来た。その頃から、「幾つもの教会を知ってよかったです」と言葉にできるようになってきた。歳を重ね、厚かましくなっただけかも知れないが、本当にそう思う。無駄な日々は一つもなかったと確信出来るようになった。あ

る種の自信も不思議に与えられていた。現在の岡山市の西大寺も含め、これまで仕えてきた教会がある町は、どこの教会も聞いたことも見たこともない所だった。転任すると、見える景色が全て変わり、自分を知らない人ばかりの町となる。そこでは新しい力が出た。救われた。

最 近の日本聖書神学校の同窓会報。地方で踏ん張っている仲間たちに巻頭の言葉が委ねられているようで嬉しい。Webで同窓会の役員会の時に、「地方の視点を」というようことを口にすることが時にあるのだが、それを受けとめてくれているのだと感じる。私は、山手線の目白駅から10分という便利な所にある母校に日帰りで往き来できない位の距離は、大切なのではないかと思う。ロシアの一部であるサハリンが見える所でも生きて来た私からすると、遠くからでないと思えないことが意外なほど多いことは深く学

んだことだった。とりわけ、身の振り方に行き悩む同労の友には、「旅に出てみよう」と伝えたい。

➤ の随想のタイトルは使徒言行録二
➤ 六章から摘んだものである。つい先日、新約学者として知られる（と言っても半世紀前の巨匠だが）コンツェルマンがこのみ言葉を「中心的な出来事」と言っていることに気付いたが、説教には反映できず、間に合わなかった。いつものことながら、残念なことの多い私なのである。（終）